

Title	書評：岡原正幸編著、小倉康嗣・澤田唯人・宮下阿子『感情を生きる：パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾大学出版会、2014年
Sub Title	
Author	熊谷, 晋一郎(Kumagaya, Shinichiro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.149- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「書評：岡原正幸編著『感情を生きる』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：岡原正幸編著、小倉康嗣・澤田唯人・宮下阿子

『感情を生きる—パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾大学出版会、2014年

熊谷 晋一郎

「時を失い、抽象的な空間にはめ込まれた」(p.10)社会学への批判であれば、今や目新しくはない。現象学的社会学をはじめとして、生きられた経験を重視した社会学はこれまでもあった。この本がそこから一歩進もうとしているのは、生きられた経験を対象とした社会学の実践それ自体が、生きられたものになるためにはどのようにしたらよいか、という問いを突き詰めようとしたところにあるといえるだろう。以下では各論文を一つずつ見ていくことにする。

*

小倉論文では、一人の人間が、いかにして社会学を行う者へと変化していったかについて、自らの生きられた経験に基づいて述べている。

筆者は、ゲイとしての自らの経験から出発する。かつて筆者は、異性愛を当たり前とする社会の枠の中で、自らの感情を押し殺し、周囲に適応しようとしていた。そのときの苦悩を自らに刺さった「棘」と呼び、以下のように述べる。

ありのままの自分に向き合おうとすればするほど、私という人間は存在不可能になった。もはや自分の「棘」にはフタをし、それを見ないようにするしかなかった。(p.20)

筆者は、常識的とされる枠の存在が棘の存立条件になっていることを踏まえ、以下のように、社会学を生きられた経験へと接地させる。

私にとって社会学という学問は、たとえていうならばポテトチップスの袋の「切りくち」みたいなものである。…このほんの数ミリの切り込みが袋を開き、視界を切り拓いてくれる。そんな、自分がいまいる枠に切り込みを入れてくれるのが社会学である (p.16)

しかし、枠の相対化は、一人きりの判断保留によって成し遂げられる作業ではなかった。当時活躍し始めたゲイアクティビストたちが、説得力ある生きた語りとロジックによって、専門家たちの言説を次々と転覆していく姿を目の当たりにしたことが、大きなきっかけになったという。「他者の「生 (life)」との出会い」(p.25)があったからこそ、棘の discovery と枠への切り込みが同時に成し遂げられたのだ。その意味で相対化とは、斜に構えたイロニーというより

熊谷晋一郎「書評：岡原正幸編著『感情を生きる—パフォーマティブ社会学へ』
『三田社会学』第20号(2015年7月)149-152頁

も、他者との出会いによる複眼化といえよう。

*

続く澤田論文は、棘の刺さった人間が、しばしば生きられた経験を生きられなくなってしまうことがある、という主題を理論的に探求している。

心理学分野における先行研究でも、PTSD や摂食障害と名付けられた人々が自らの過去を想起しようとするときに、具体的な感情や時間軸を思い出せず、「時を失い、抽象的な空間にはめ込まれた」(p.10) 形式で思い出しがちな傾向(過剰一般化記憶=over-general memory: OGM と呼ばれる)があると報告されてきた。生きられた経験を重視する実践は、太い棘が刺さった人こそ生きられた経験にアクセスしがたいということを深く了解しない限り、抑圧的なスローガンに墮してしまうだろう。

筆者は、感情性と時間性が同時に失われた離人症の症例報告から出発する。感情性と時間性が同時に失われることがあるという知見は、両者をつなぐ共通項の存在を予感させる。筆者はその共通項について、「現実との生ける接触」(p.43)からの剥離という Minkowski の見解を支持しつつ論を展開していく。

筆者は、身体と世界との生きた接触が失われることによって、感情性と時間性の喪失を説明しようとしている。しかし後述の宮下論文や岡原論文でも触れることになるが、皮膚の内側の領域として定義される解剖学的な身体が予期を裏切る作動をし、身体とそれを取り巻く環境とが過剰なほどに同調するような状況もあるだろう。そのときに、生きた接触が失われるのは、どことどこの間だろうか。

さらに筆者は、感情性と時間性を失った人の傍らに寄り添うことの可能性について考察を行う。世界との接触を失った身体は、再び接触を取り戻そうとして、喘ぐように動く。筆者は、自らも喘ぎながら、傍らに寄り添うことで言語以前の意味世界を共有する一抹の可能性に賭けているかのようだ。そして最後に筆者は、自分自身が、かつて大切な人の痛む姿を目の当たりにし、ただひたすらに寄り添うことしかできなかった無力さを生きたということを開示する。

*

澤田論文が理論的な探求を行っているのに対し、続く宮下論文は、類似した主題をオートエスノグラフィの角度から丹念に跡付けている。

「季節の変化を身体が感じとるように、あるとき気づけば摂食障害と呼びうるものの渦中にいた」(p.59)と懐古する筆者は、摂食障害をめぐる様々な言説の枠をいったん保留し、もう一度最初から、自らの生きられた経験を等身大の言葉でとらえ返す作業をはじめ。その作業が、インタビューという相互作用を介した他者の生との出会いを通して遂行される点は、小倉論文

の主題とも相通じるものがある。

〈私〉の内側を食べ物で洗うことで、透明になりたいという記述にはうならされた。透明化、あるいはその延長線上に予感される死の官能とでも言うべきものを垣間見てしまったものならば、このテキストを軽く読み飛ばすことは難しい。

筆者の過食嘔吐のサイクルはやがて弱まっていく。そのきっかけとなったのは、実に物質的な環境の変化と、他者のまなざしからの遮蔽だった。他者を退けること、身体と世界との道具的な関係を断絶させることが、むしろ感情性の回復をもたらしようという記述は、澤田論文で提示された理論にどのような示唆を与えるだろうか。

筆者は最後に、過食嘔吐が落ち着いたあとのエピソードを紹介している。

普通に人並みの食事ができるようになってきて、その頃に、今付き合っている相手に、…すごいぶつかるっていうか、パニックみたいになっちゃって、泣きわめいたり、殴りかかったりするときがあって (笑) [2013.8] (p.70)

いまだ図式化や意味化が達成されていない段階で、それでも感情性の取戻しが始まっているということ。そしてその傍らには、きっと信頼する他者の存在があるということ。これらのことは、澤田論文の祈りにも似た結論と呼応している。

*

岡原論文は、喘息発作という経験が、本人の生と親密な他者との関係にどのような影響を与えるのかについて描いたオートエスノグラフィーである。

本論文でなによりも印象的なのが、発作というイベントによって調律されていく家族関係のリズムである。大きな喘息発作の到来は、不安を媒介に家族の結びつきを一時的に高めるが、発作が過ぎ去ると、各々のメンバーは喘息の原因をめぐる自責的・他責的な負い目のモードに入って互いに責め合う。家族に共有されていた不安と負い目という二つの感情は、前者が家族の一体性を高めるのに対して、後者は家族に亀裂を与えるのだ。

みずからの発作がきっかけとなって、「家族みんなの生活がその順調な流れを突然に停止させ、…歯車を狂わせ、私の喘鳴に同調していく」(p.99) 日常の中で、筆者は、「家族の日常になんらかの異変があれば、それを「私のせい」にする」(p.99) という、頑なともいえる思考様式を習慣化させた。そこでいう異変には、上記のような発作後の亀裂も含まれる。亀裂に対して負い目を感じ続ける筆者が、「もし、その亀裂を一時的にでも修復しようとするれば、それは間違いなく喘息の発作という手段しかなかったのである」(p.103) ここに、「発作を経由する、一体性と亀裂の無限循環」(p.103) が存在していた。

発作→不安による一体化→寛解→負い目による亀裂→発作…という、身体と家族の力学が密

に連関しあつたサイクルは、それを維持するメンバーの誰一人として制御できない自律的な運動であつた。むしろ制御しきれない自生的な運動に、家族みんなが身体もろとも巻き込まれていたといえる。そのような状況に風穴を開けてくれたのが、発作を緩和させてくれる簡易な吸入器であるメジヘラーを、筆者が自己管理できるようになったという出来事だつた。

メジヘラーの自己管理は、「《自分＝喘息》を、管理する主体である自己と、管理すべき対象である喘息発作とに、すくなくとも私の意識の上では、分離した」(p.106)。しかし、メジヘラーの使用が本人の意思決定にゆだねられるということは、同時に、不適切な使用の責任を本人が負わされるということでもあつた。しかも、メジヘラーは精神的依存を生じさせようという理由で過度の使用が医学的に禁止されており、かつ、過度かどうかの基準が明らかではなかつたため、「発作自体を悪いこととして感じている私にとっては、たとえそれが適度の使用だつたにせよ、なにか悪いことをしているような気になつたのである」(p.108)。

強すぎる相互依存関係で結ばれた親密圏を生き延びたものならば、つながりすぎの怖さは骨身にしみてわかっている。再び制御不可能な家族の力学に巻き込まれることへの忌避感からか、当時の筆者は「何物にも依存せざる意思決定主体としての自己」という幻想に依存した。それはおそらく、メジヘラーという道具との抜き差しならない関係を引き起こすものでもあつただろう。精神的依存を理由にした医学的規範が、むしろ精神的依存の触媒になりうるという逆説は、強調してもしすぎることはない。

*

生きられた社会学のマニフェストともいえる本書は、新しい知の胎動を予感させるものである。またその具体的な方法として、オートエスノグラフィーを用いるというスタンスにも可能性を感じる。

だが、過去の生きられた経験を跡付ける作業で終わったのでは、おそらくまだ十分に生きられた社会学とは言えないのかもしれない。社会学をすることが、過去を振り返り表象するだけでなく、未来の予期や行為を変化させ続けるサイクルの中に位置付けられること。言い換えると、社会学をすることが、仮説的な予期の生成と、仮説検証への水路付けを導くようになってはじめて、生きたものになるのではないか。

未来志向の生きられた社会学があるとしたら、それはどのようなものになるのだろう。

(くまがや しんいちろう 東京大学)